

新入架史料

新入架原本・古写本類

○富岡八幡宮及慶珊寺縁起

(〇〇一〇一―二)

富岡八幡宮とその別当寺である慶珊寺（ともに横浜市金沢区富岡）の縁起で、寛永三年（一六二六）の成立。富岡八幡宮縁起は前半を欠く。『神奈川県史』資料編八近世五下六〇一頁以下に掲載されている慶珊寺所蔵本と比較すると、両縁起とも本奥書年月日下の「吉成（花押）」を書写していない。また、慶珊寺縁起には元禄十一年（一六九八）、高野山西禅院真伝による書写・寄進の識語がある。旧未整理史料四〇六。二〇二二年度修復。

富岡八幡宮縁起

一卷 全長一八〇・三×三一・三cm

慶珊寺縁起

一卷 全長二四九・一×三一・三cm

(堀川康史)

○先徳巻数

(〇〇一四―一七)

鎌倉時代初期に作成されたと思われる巻数集。裏書あり。二種以上の巻数集を貼り継いだ編纂原本であり、外題および目録の筆者は成賢（一一六二―一二三一）であろう。観賢・泰舜・円照・仁海・深覚・信覚・義範・範俊・勝寛・定海等の巻数三十通（裏書を含む）を、金輪法・仁王経法・請雨経法など修法ごとに類聚したもの。『覚禅抄』等の修法関係史料に収められていない巻数を含む。二〇二二年度購入。

一卷 (二七紙) 二八・六×一一五〇・cm

(新井重行)

○高御座錦綾・金具等絵図

(〇〇五七―一〇)

卷子一軸。紙本着色。江戸時代後期～明治時代写。五四紙。高御座に用いる染織品の文様見本、金具等の部品図、即位儀に庭上に立てる幟の柱と支える木組みの図。即位調度図の一部か、これで全体か、原題も不詳のため仮題。

彩色も精細であり、法量の注記もある。図中に墨書された注記は以下のとおり。「御帷紫綾織本」「剣璽之案上帳」「壇上階之錦」「縁之錦」「鳳形大寸法・璽路」「同小寸法」「同裏」「露盤之金物」「屋根金物・雀瓦ノ金物」「蕨手金物」「蛇舌帽額」「頂上御鏡寸法」「同裏形(図中に「高御座頂上御鏡」と盛り上げ)」「同(銅鳥日月四神之簍)」「錯簡」「銅鳥日月四神之簍」。軸を外して太巻仮芯に巻き取る仮処置。未整理九〇三のうち。

(藤原重雄)

○散兵調練図

(〇〇六七―一)

幕府伝習兵をモデルにした散兵調練図。歌川芳員（うたがわよしかず、生没年不詳）は江戸末期から明治初期の浮世絵師。

(一) 散兵開列静止、(二) 散兵組々結集セシムル法、(三・四) 隊列背面図・円陣作レ、(無番号) (放火)、(五) (円陣)、(六) 側面放火、(七) 蹲踞放火・転シ放火、の各画面からなる。

(一) には維新本に無いドラム打ちが加えられている。また、手前に指揮官がいる。このほか、維新本は(五)のあとに(三・四)画面の無番号と上記(無番号)が(六)のあとに來ている。上記(無番号)は本来(六)の後ろにあるべきか。(七)も維新本と構図は似ているが異なるもの。伏射シーンが無いのもう一紙あったかもしれない(後欠か)。(七)に寅十二月の改印がある。慶応二年(一八六六)十二月か。

版元は「つきぢ大金」すなわち大黒屋金之助(金次郎とも、築地小田原町二丁目平三郎店の地本問屋)。

(保谷 徹)

○伊達政宗消息

(〇〇七一―七二)

伊達政宗が二女むう(牟宇)姫にあてた手紙。むう姫は慶長三年生まれで、

政宗四十二歳の時の子供。本状は元和・寛永の頃のものと思われ、姫が政宗に、瓜をひげこ（髯籠）に入れて送ったことに対する礼状。政宗の娘に対する愛情を読み取ることができる。

（元和・寛永）十九日 折紙 楮紙（一紙）縦三〇・五×横四〇・〇cm

（村井祐樹）

○南禅寺東禅院文書

（〇〇七一―七三）

南禅寺東禅院に伝来した文書群。一卷十一通。外題「東禅院領之公文」。

年紀のあるものは、文安四年（一四四七）から文亀二年（一五〇二）にわたり、所領では、摂津西成郡津村郷に関する五通、近江佐々木香庄の二通、洛中地の二通などからなる。東禅院は、景南英文（一三六五―一四五四）の塔頭で、明治年間に廃絶し、慈氏院に継承された。伝来史料は分散し、その現状は不明な点が多い。『分散した禅院文書群をもちいた情報復元の研究』（東京大学史料編纂所研究成果報告二〇〇九―一六）参照。本史料は、かつて『平成七年古典籍下見展観目録』および「誠堂書店創業一〇〇周年記念『古典籍善本展示即売会目録』（二〇〇三年）」に掲載されている。将軍足利義教に重用された禅僧およびその塔頭について、具体像が明らかになる貴重な史料である。

文安四年五月二十五日 管領細川勝元書下／三月十五日 葉師寺元吉書状／卯月十七日 細川高国書状／三月二十八日 斎藤元隆書状／文亀二年九月十日 室町幕府奉行人連署奉書／同日 室町幕府奉行人連署奉書／永正五年八月二十四日 斎藤貞船奉書／永正十五年十一月二十二日 室町幕府奉行人連署奉書／延徳三年十月十日 室町幕府奉行人連署奉書／同日 室町幕府奉行人連署奉書／文明十五年九月十九日 円灯・宗繁連署状

一卷（二二紙）縦二八・二cm

（山家浩樹）

○性阿莊嚴田年貢散用状等

（〇〇七一―七四）

本史料は、延文二年（一三五七）正月二十三日・永和三年（一三七七）三月七日・至徳二年（一三八五）十月日の性阿莊嚴米に関する史料三通一〇紙

を一巻に仕立てている。

性阿莊嚴米については、永和元年の性阿莊嚴田所当收納散用状を『大日本史料第六編之四十六』に収載するなどしており、当該史料は興福寺の旧蔵史料と判断される。当該史料に含まれる永和三年の史料は『大日本史料第六編之五十一』に収載した。至徳二年の史料は今後に刊行される『大日本史料第六編』に収載予定である。二〇二二年購入。

延文二年正月廿三日性阿莊嚴米算用状（六紙。二五・六×三三・三cm、二五・三×三四・五cm、二五・三×二四・五cm、二五・五×九・一cm、二五・五×三三・三cm、二五・六×三四・〇cm）。永和三年三月七日性阿莊嚴米算用状（二紙。三〇・二cm×三九・六cm、三〇・二×三八・八cm）。至徳二年十月日性阿莊嚴田検見注進状（二紙。二七・七×三八・一cm、二七・七×三八・六cm）。

（西田友広）

○公茂公記

（〇〇七三一―二〇）

乾元二年（嘉元元年…一三〇三）五・六月「恒明親王御降誕記」（亀山法皇皇子、生母昭訓門院）。『歴代残闕日記』五二所収「押小路内大臣藤公茂公記」が同内容。「貴五四―一五」と同系統の写本で、原本からの影写を祖本とする。本奥書「此一巻、被借下／禁裏御本（正記也）／嚴君令書写校合給畢／寛文二曆（一六六二）仲春下浣／参議左大弁藤原（中御門）資熙」あり。御衣箱の絵図および儀式指図二点あり。朱注記若干あり。木軸を外す仮処置。未整理番号二五〇。

（藤原重雄）

○中殿御会図

（〇〇八〇―一七）

卷子一軸。江戸後期写。紙本白描淡彩。唇、また顔に淡く朱を入れる。北村家本の直模的な転写本の系統。天地に横界を引き、祖本の範囲を示す。詞書に相当する和歌は一具となっていない。本紙六紙。軸木の木脂が本紙に滲んでおり、外して処置。未整理九〇三のうち。

（藤原重雄）

○施條砲射擲表 (〇二六七一)

熊本藩士池部啓太(二七九七一—一八六八、春常・如泉)著。

文久二年(一八六二)、池部は高島秋帆の命により米国献貢の施條砲(ラ
イフルカノン「ターゲレン砲か」)の射擲表を作成し、さらに弟子である魚
住弘河の求めに応じて仏国施條砲の射擲表を作成した。装薬量・仰角・距離・
時間などの砲撃データである。弟子魚住により、文久の米国献貢砲の射擲表
復刻と続編・附山砲表を合綴する。

(表紙題箋)「施條砲射擲表 全」

(中表紙)「施條砲射擲表 肥後如泉池部翁著、戊辰初夏改正新刻、有待窩
蔵板」

・「仏米二砲射擲表 告」慶応丁卯十二月、池部春常識

・「仏米二砲射擲表端書」慶応四年三月識、魚住弘河。「仏式溝路砲射擲
再交距離表」

・「米式船忽砲射擲再交距離表」

(中表紙)「施條砲射擲表 肥後如泉池部翁著、戊辰初夏改正新刻、有待窩
蔵板」

・「施條砲射擲表 自述」文久二年十二月、池部春常勤識

・「施條砲射擲表 東肥 池部春常著」

・「施條砲射擲表奥書」慶応四年四月、平弘河

(中表紙)「施條砲射擲表続編、附山砲表 肥後如泉池部翁著、慶応四戊辰
初夏、有待窩蔵梓」

・「施條砲射擲表続編 告」慶応四年、池部春常識

・「施條砲射擲表続編」肥後池部春常著、門人村田武筭校訂

・「山用忽微砲射放表」肥後池部春常著
(奥書) 后四月 魚住弘河

(保谷 徹)

○田染文書

豊後国田染莊を本拠とする田染氏に伝来した、中世文書三通と近世文書二
通の計五通からなる文書群である。大分市在住の個人より本所へと寄贈され

(〇四七一—五三)

たものであるが、それ以前の昭和四十七年に影写本(三〇七一・九五—三八)

が作成されており、中世分はここに収録されている。田染氏は、宇佐神宮の
神官身分を帯した在地領主で、いくつかの系統に分かれていた。同宮番長職
を相伝した永弘氏の一流が、多くの関連文書を有していて有名であるが、本
文書を伝えた家はこれとは別系統にあつたらしい。同家にいまでも伝来する系
図を参照すると、この一流は、鎌倉期に田染莊を掌握していた宇佐氏から、
その権限を継承した田部氏・香志田氏の末裔だったと推定されている(海老
沢衷「宇佐栄忠と豊後国田染莊」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 哲学・
史学編』三六号、一九九〇年)。

五通の文書についてその詳細を示すと、①卯月十日付「大友義鑑書状」、

②二月三日付「大友円斎(義鎮)書状」、③十一月二十六日付「大友義統書
状写」、④四月十七日付「三浦梅園書状」、⑤三月二十五日付「三浦梅園書状」
のようになる。①は天文三年(一五三四)に大友氏と大内氏の間で戦われた
勢場ヶ原合戦に関わるもの、②は円斎という名乗りと田原親宏に言及してい
ることから天正七年(一五七九)に比定される。③は年未詳だが、来縄郷内
内小野名を安堵するものであるが、本文書を伝えた家は、近世になるとこの
地に居を構えていたことが知られている(前掲海老沢論文)。④⑤の近世文
書は、田染莊の東隣、安岐郷にあつた著名な哲学者、三浦梅園の手になる書
状で、在地における親密な交流をうかがわせる内容になっている。

五通、①二四・六×三六・七cm、②一六・六×三八・六cm、③二七・四
×四一・一cm、④一四・〇×三八・〇cm、⑤一三・九×一五・五cm
(井上 聡)

○大友義鑑感状写

(〇四七一—五五)

本文書は、天文三年四月六日に豊後国山香郷にて勃発した、いわゆる勢場
が原合戦における戦功を、同月二十一日に大友義鑑が賞したものである。同
合戦は、北部九州の覇権をねらう大内義隆が豊前より豊後へと進撃し、大友
義鑑がこれを防衛する形で展開した。大内軍と大友軍の衝突としては最大規
模で、以後大内氏滅亡までの基本的な勢力図を固めた出来事といつてよい。
宛所となっている本河内新左衛門については不詳であるが、山香郷内に地名

が残ることから、同地を本拠とする国人であったと推察される。同日付の義鑑感状は他にも多く知られており、同合戦の規模が伺われる。

一通 一五・七×三〇・五cm

(井上 聡)

○万里小路惟房書状

本文書は、武蔵国河越仙波の中院（仏地院）に関連する文書である。中院は、天台談議所である無量寿院の子院で、有力寺院として知られていた。永禄元年十月十五日、中院院主の斎芸は、曼殊院寛如の執奏を得て権僧正に任じられた。この惟房書状は、斎芸の任権僧正を伝える口宣案に添えられたものである。中院に伝来する文書のうちには、当該の口宣案および寛如書状が伝来している。

惟房がこの添状を認めたのは、子の輔房が口宣の奉者になっていることや、書状中に使者として現れる上乘院公督が惟房の叔父であることなどによるのだろう。実際のところ、任官の仲介を担っていたのは、惟房自身であったと推察される。

なお同文書は、かつて大阪願泉寺にあったことが、影写本から知られている。同寺には青蓮院関係の史料が多く伝来していることから、斎芸の任権僧正にあたり、口宣案や寛如書状は本人に与えられたものの、当該書状のみ門跡のもとに留められたと考えられる。

一通（二紙）三一・四×四三・〇cm、三一・二×三一・六cm

(井上 聡)

○中山定親奉称光天皇口宣案

本文書は、醍醐寺清浄光院の僧快玄を権僧正に任じる口宣案である。奉者となっている蔵人頭は『薩戒記』の記主中山定親で、同記の応永二十七年三月二日条には、正親町三条公雅から、快玄の任権僧正について宣下するよう指示があり、口宣案を作成して進上したと記されている。本史料は、まさにこの記述と対応するもので、日記に記されたように、本史料は定親の自筆であることがわかる。

(〇四七一―五七)

一通 三五・五×四五・〇cm

(井上 聡)

○石見国美濃郡高津川匹見川筋絵図

本史料は現在の島根県益田市横田町にあたる、石見国美濃郡横田村を描いた絵図である。「潰ヶ前」（つえがまえ）地域を中心に土手や水路について距離とともに記されている。図中に「森ヶ窪新田」とあることから、「森が久保原」に新田五町四反が開拓された明和四年（一七六七）以降（平凡社日本歴史地名大系「島根県の地名」横田村の項を参照）の絵図と考えられる。裏面に「下地扣」の文字と「佐伯」の朱印がある。二〇二三年購入。

一枚（二二紙）九四・四×一五八・六cm

(西田友広)

○興臨院文書

興臨院は開山小溪紹愆、檀越畠山義総の大徳寺塔頭である。小溪が大徳寺を退院した大永六年（一五二六）二月以降、天文二年（一五三三）までの間に創建されたと考えられる。能登畠山氏の滅亡後は、加賀前田氏の庇護を受けた。

本文書群は、その興臨院に伝来した文書で、一部同じく南派の瑞峯院の文書を含んでいる。本文書群が当初納められていた被蓋箱の箱蓋面に添付された付箋によると、昭和三十二年（一九五七）に本所が購入したとみられる。その後未整理資料として書庫内に留置されていたが、この度整理を行った。

ただその重要性は早くから知られていたようで、一部の史料は利用、紹介されている（川上貢「大徳寺とその塔頭」『禪院の建築（新訂）』、『加能史料』。全五十一通。畠山氏被官の書状四通のほか、興臨院の寺辺所領関係史料や近世初頭に至る建築関係史料、瑞峯院の味噌小日記などからなる。

畠山氏被官の書状は、三宅宗隆書状（九月十四日付、切紙、本紙一八・六×四五・六、封紙三一・四×一四・〇）、平菟知書状（九月十五日付、切紙、本紙一七・四×四五・四、封紙二七・五×一五・八）、井上英教書状（卯月廿三日付、切紙、本紙一六・八×四五・八、封紙二八・八×二一・九、遊佐盛光書状（九月十四日付、切紙、本紙一四・〇×四七・七、封紙二八・八

(〇六七―一二九)

×一〇・〇)の四通である。天文廿年(一五五一)五月二十三日に畠山義統が「徳胤塔頭領所」として諸岡村を興臨院に寄進しているが(畠山徳祐袖印畠山氏奉行人連署奉書「東京大学文学部所蔵雑文書」、これと呼応する、櫛比諸岡村名散田指出帳(天文廿年六月三日付、続紙、七紙、二五・五×二二四・七)もある。興臨院と能登畠山氏の関係や、畠山氏奉行人の動きを考えると上でいずれも興味深い史料である。

造営関係史料も注目される。興臨院本坊南面上葺奉加納下帳(天正九年六月十六日付、冊子、八丁、二四・二×二二・〇)、興臨院本坊北面上葺日記(天正十一年四月廿五日付、冊子、三丁、二六・八×一九・二)、興臨院本坊北原上葺并棟包銀納下帳(慶長五年三月日付、冊子、四丁、二五・六×二〇・〇)、興臨院処々修造之小日記(寛永二年七月晦日付、冊子、六丁、二五・六×二〇・七)など七通があり、建築史の観点からも注目されるものと思われる。修理が必要な史料も多いが、本所ホームページにおいてデジタル画像を一般公開しているので、そちらからご利用いただきたい。

五一通

(小瀬玄士)

○Journal of Lieutenant Francis Clayton, 1862-1863 (英国海軍大尉フランシス・クレイトン航海日誌、一八六二―一八六三年) (〇七四四―一)

英国海軍大尉フランシス・S・クレイトン(一八三八―一九一三)による航海日誌。

Journal of H.M.S. Galatea (一八六二年五月十六日―十月三日)、Journal of H.M.S. Perseus (同年十月一日―一八六三年九月十日)の二部に分かれる。

英国軍艦ガラティア(一八六二年五月十六日―十月三日)、同パーシウス(一八六二年十月一日―一八六三年九月十日)搭乗時のもの。

ガラティア艦によるバルト海航海に参加後、クレイトンはプリマス港で東インド・中国ステーション所属のパーシウス艦に配属され、日本海域へ向かった。日誌には鹿児島戦争(一八六三年八月十五日―十七日)の貴重な記事を含む。十四歳で英海軍に入ったクレイトンは、その後、海軍中佐(一八七〇年)、海軍大佐(一八七九年)となり、オーストラリア・ステーション

で活躍。一九〇一年に海軍中将、一九〇四年に海軍大将となった。

(保谷 徹)

○下間頼廉書状

(〇八二五―一二)

本願寺の坊官であった下間頼廉の羽柴秀吉宛ての書状。天正十一年四月、越前北庄において柴田勝家を滅ぼし、凱旋したばかりの秀吉に、新門跡教如が出した書状の副状として発給されたもの。本願寺が、信長亡き後の天下人が誰になるかを注視しており、秀吉勝利の情報を得て速やかに祝儀を送っていたことがわかる。

(天正十一年)四月二十七日 一幅 烏子紙 本紙縦十六・七×横三八・八cm

(村井祐樹)

○大乘院家領若槻庄土帳

(保―三二一)

一鋪(九紙貼り継ぎ)。大和国若槻荘の鎌倉時代後期成立にかかる坪付図の模写。その原本は、興福寺大乘院の旧蔵にかかり、菅政友の手を経て、現在は茨城県立歴史館に所蔵されている。この本には作成年代にかかる記述を載せないが、本所にはこのほか、明治四十一年(一九〇八)菅孝次郎(政友の子)が所蔵していた際に模写したことを銘記する模写(仁―一一〇)一幅を架蔵している。

(末柄 豊)

新入架特殊冤書

○加納家史料

(加納家史料)

上総一宮藩の藩主であった加納家の史料、六五二点。

慶長年間、加納久利が徳川家康から頼宣付を命じられたのが紀伊和歌山藩士加納家の始まりであるとされる。三代政直の次男久通は親族加納久政の養子になって松平頼方(後の徳川吉宗)に仕え、吉宗が將軍になると幕府旗本となった。久通は吉宗の御側御用取次を勤めて信任厚く、享保十一年(一七二六)には加増されて一万石の大名となった。その所領は伊勢国・上総国・下総国に分散していたが、伊勢国治田郷(八田郷)等を領したことから伊勢

八田（はった）藩、あるいは陣屋の所在地に因み伊勢東阿倉川（ひがしあくらがわ）藩と呼ばれる。寛政八年（一七九六）上野国内で三千石加増、文政元年（一八二六）陣屋を上総国一宮に移し、そのまま廢藩を迎えた。本史料には、慶長十三年（一六〇八）加納平右衛門（久利）宛徳川家康領知朱印状をはじめ、歴代の領知朱印状・領知目録、享保元年（一七一六）以降の当主官位叙任に係る口宣案・宣旨・位記等、老中書付・老中奉書、系譜・家譜類等の他、近世後期歴代当主の文化的素養を反映して書画・茶席図・版本なども多く含まれる。また、最後の藩主であった久宜は、廢藩後法曹・地方行政・国政の各種役職を歴任し、交友関係も広がったため、その時代の史料も多い。

（鶴田 啓）

○神野志隆光氏寄贈史料

本史料群は、神野志隆光（こうのし たかみつ）氏（神野志隆光氏寄贈史料）が研究のために蒐集した江戸時代から明治期に刊行された『年代記』関係の版本から成っており、二〇一七年同氏により寄贈された。

東京大学名誉教授 神野志隆光氏（一九四六―）は、『古事記』・『日本書紀』研究で知られる日本文学者で本学教養学部にて一九八六年から二〇一〇年まで在籍されていた。

神野志氏の本史料群を用いた研究成果は、「その後の日本書紀―『年代記』の展開」があり、『日本書紀』の現代にいたるまでの受容の歴史を『年代記』をとおして考察されている。

上記論文の要旨を一部抜粋すると神野志氏は「テキストの実際にそくしていえば、『日本書紀』そのものにかわって、それを再構成したもの（『年代記』類）がその役をはたしてきたのであった。平安時代以降多様な『年代記』類がつくられ、江戸時代には出版によって流布された。それが『古代』の「常識」を形成していたのであった。実用化といってもよいが、そうした展開の全体が、七二〇年の成立から現在にいたる『日本書紀』の「その後」にはかならない。『年代記』の問題を軸としてそうした見わたしが可能となる」と述べられている。氏のこうした視点による『年代記』研究に基づき、氏が自ら蒐集した江戸時代から明治期に刊行された版本類が本史料群なのである。

主だった版本を分類すると①『日本王代二覧』、『大日本國帝王年代目録（和漢合運図）』、『新編和漢歴代帝王備考』などがあり、神野志氏の「江戸時代には、『年代記』類がきわめて多様なかたちで出版される。実用性をさらにくわえたものが庶民向けにも出版されて、ひろく流布し、それによって庶民にまで『歴史』の知識が浸透していった。そのなかに『日本書紀』は生きていたといわなければならない」という問題意識で蒐集された版本類である。

②神野志氏は「降って江戸時代の末になると、『重宝記』とよばれる類、『雑書』のなかに組み込まれたものや、『雑書』と称されたものとあわせた―『雑書』と『年代重宝記』とが表裏をなす―一枚物のごときまで、大きさも小本から三ツ切（手帳サイズ）の掌中版まで、じつにさまざまなかたちで『年代記』類が流布してゆく」と述べられ、掌中本、横本と言われる手帳サイズの版本が庶民の歴史認識に大きな役割を果たしたことを指摘された。本史料群の『掌中増補和漢年代記集成』、『改正増補 和漢年代記集成』などはこの研究視点で蒐集されたのである。

③神野志氏は前近代のみではなく明治期以降の版本類である『内国史略』、『明治新刻 国史略』、『日本史畧』、『稿本国史眼』なども蒐集された。とくに『稿本国史眼』は、重野安繹・久米邦武・星野恒により編纂されたが、三者が東京大学史料編纂所の前身である編纂臨時編年史編纂掛に在籍していた明治二十三年（一八八〇）九月に刊行されたものであり、本所所蔵の特殊蒐書『重野家史料』には『稿本国史眼』刊行に関する多くの史料が含まれている。個別の史料は江戸時代以降の版本・印刷物から成っているため、他の研究機関にも所蔵が確認できるが、史料群としては江戸時代から明治期に至るまでの日本の歴史認識の変遷を一覧できることが特徴であるといえよう。

参考文献 神野志隆光「その後の日本書紀―『年代記』の展開」、『京都国文』第二四号、二〇一六年十二月

全一九七冊

（生駒哲郎）

○後藤紀彦氏旧蔵コレクション

（後藤紀彦氏旧蔵コレクション）
本所元職員である故・後藤紀彦氏の自宅にあった諸資料のうち、本所の事

業にふさわしいものを選別した上で、ご遺族からご寄贈いただいた。

後藤（角田）紀彦氏は名古屋大学で網野善彦などの教えを受けて日本中世史を専攻し、遊女の研究や、御成敗式目など法制書の探索に力を尽くした。一九七一年から八七年にかけ、図書整理掛の事務官などとして本所に勤務しており、本所史料によく付属している独特の丸みを帯びた筆跡のメモは、後藤氏の手になるものである。古書蒐集にも熱心だったようで、古書肆から購入したさまざまな資料が旧宅には保存されていた。

今回「後藤紀彦氏旧蔵コレクション」として入架した諸資料は、近世写本や拓本など様々であるが、近衛家本追加と同内容である「追加目録 全」（後藤紀彦氏旧蔵コレクション）。「少府図書」の蔵書印あり、姫路藩主酒井家の旧蔵書か）のように、入手の喜びを彼の筆跡でメモしたものもあり、研究者としての後藤氏の面目を伝える。

全五六点

（木下竜馬）

新入架写本

○称名寺并東寺文書写

（四〇一五―四）

本写本は、金澤称名寺と京都東寺に伝来した古文書・典籍・指図・器物等を書写して一巻としたものであり、前半に称名寺関係史料七点、後半に東寺関係史料二九点を配置している。文字配置・字形などからみて臨模の方法で写されたものであるとみられる。両史料群が取り合せて一巻とされた経緯などは明らかではない。

料紙は楮紙で、一紙がおおよそ縦二七・八cm×横四〇・七cmに調整された全三一紙からなっている。表紙・軸・裏打ち等の仕立ては施されていない。巻子の端裏下部には、四隅に「史料備用」の文字を一字ずつ配した赤茶色インク飾り枠三段の図書ラベルが貼付されているが（旧番号七〇四／史／一一）、史料編纂所に入る前の蔵書印や書写識語などはなく、史料編纂所所蔵となった経緯も不明である。ただ、第六目奥下部に「近藤守重手写」という注記があることから、おそらく近藤重蔵による模写本で、江戸時代の寛政〜文政年間頃の作成であると考えられる。

書写された史料は文字史料以外の指図が比較的多く唐櫃や経帙の札という器物の模写もあって、近世の好古の趣向が感じられる。書写史料のほとんどは、現存の「称名寺文書」「東寺百合文書」「教王護国寺文書」原本や写本によって知られているものであるが、これまで未知の指図二点、経帙題籤札一点があるほか、原本では欠損している文書の欠損前の状態がわかるものもあり貴重である。

これ以上の詳細については、貫井裕恵・高橋敏子両氏による史料紹介が予定されているので、それを参照してほしい。

（木下竜馬）

○三秘集

（四一五六―一三二）

表題は「御附札三秘集」。小口に「三秘集」。

諸大名から幕府の老中・三奉公ほか各所への問合せ・伺い等と付札・下札・挨拶などによる回答を編纂したもの。元文二年（一七三七）から文化三年（一八〇六）まで、卷十三末尾には全十二巻通計三六四条とある。卷十三が「目録」。

活字本は東北大学附属図書館本を底本とし（甲本）、明治大学刑事事博物館本を対校本（乙本）とする。

本書卷一には朱書校訂があり、「書面之外壳渡証文六通原本二有之候得とも不用之品二付除之」などの注記があり、これは乙本系統と考えられる。朱書きはほかに卷十一にも。

卷一・十一・十二に若干の虫損があるが、本文にはかかっていない。

（保谷 徹）

新入架写真帳

○日本史料「京都府」仁和寺史料 御経蔵 「長崎県」長崎町乙名本山家文書（史料編纂所寄託分）

○古文書「古文書集」後撰芸業 「宮城県」伊達家文書 「京都府」醍醐寺文書（二七六―二八四函） 長福寺文書 井形正壽氏所蔵文書